

神の御霊のみ業としての宣教

使徒パウロは第1コリント1：18以下で「十字架の言葉」すなわちイエス・キリストの十字架の死と復活という出来事において現わされた神の救いのみ業（福音）と人間の知恵とを対比させて論を進め、人間はたとい学問や教養があり、すぐれた才能と知識の持ち主であっても、その目が罪によってくもらされている限り十字架のイエスを受け入れることができない、それを愚かとし、ばかばかしいと反応する、これが神から離れた人間の罪の現実であることを逆説的な表現をもって語った。

使徒パウロは、ローマ帝国第3の学問都市ギリシャのタルソに生まれ、若くしてエルサレムに留学し、その時代の最高のラビ（ユダヤ教教師）といわれたガマリエルの下で学んだ人であり、従って回心前の彼はギリシャの教養とラビの弁証論を身に付けた人であった。しかし、ダマスコ途上における復活の主イエスとの出会いと劇的回心およびその後の信仰経験は、人間の救いに関しては、この世の知恵は、それがいかにすぐれたものであっても、罪の前にはまったく無力であるという事実を彼に悟らせた。

それゆえ、福音を宣べ伝えることにおいて、彼はけっして、人を魅惑するような修辭学的な表現や、人をあっと言わせるような巧みな哲学的用語を用いて自分の知恵を見せびらかすようなことはしなかった。彼はただ「イエス・キリスト、十字架につけられたキリスト」のみをストレートに語っていた（1：23、2：3）。なぜなら、それこそは、そしてそれのみが、人を救いに導く神の力であり、神の知恵であることを知っていたからである。

私は牧師（伝道者）になって今年で40年になるが、その間、つくづく教えられてきたことはまさにその事、すなわち、人の救いはけっして人間の知恵や努力によるものではなく、神の恵みのみ業であるというこの一事である。語る者がどんなすぐれた知恵や巧みな方法をもって、これでもか、これでもか、と意気込んで説得しても、聞く者の心を造り変え、回心させることはできない。人間的な知恵の言葉や巧みと見える説得力も、罪の前にはまったく無力なのである。

人の救い（回心）は、パウロが4節で言うように、神の御霊とその力の現われである（2：4）。けっして人間の巧みな知恵や雄弁によるものではない。それゆえパウロは、人間の知恵が求められ、人間の知識が誇りとされたギリシャの町コリントで、あえてすぐれた知恵や巧みな言葉を用いず、「イエス・キリスト、しかも十字架につけられたキリストのみ」をストレートに語っていったのである。その時、御霊は聞く者の心に働き、救われる者が次々と起こされ、こうして神の力が現わされ、異教の地コリントに教会が出来たのである（2：5、使徒言行録18：8参照）。

「神は知恵ある者に恥をかかせるために、世の無学な者を選び、力ある者に恥をかかせるために世の無学な者・・・世の無に等しい者を（あえて）選ばれた。それはだれ一人、神の前に誇るができないようにするためであった」と語った使徒は（1：27～29）、後にローマの信徒たちに宛てて「私は福音を恥としない。それは、ユダヤ人をはじめ、ギリシャ人にも、すべて信じる者に救いを得させる神の力である」と書いたが、その言葉は実に真実である。私たちがその神の恵みと力によって今日あるを得ているのである。